銭甕山遺跡の調査

—井波町清玄寺所在中世墳墓発掘調査概報—

1979年3月

富山県教育委員会

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1

Ⅱ　調査の概要……2
　1．調査以前の知見……2
　2．調査の経過……2

Ⅲ　遺　　構……4
　1．配石遺構と土坑……4
　2．遺構の復原……7

Ⅳ　遺　　物……8
　1．珠洲系須恵質中世陶器……8
　2．銭甕山出土伝承をもつ壺……9

Ⅴ　遺跡の性格……10

例　　言

1．本書は，富山県東砺波郡井波町清玄寺に所在した銭甕山（ぜにがめやま）遺跡の発掘調査概報である。

2．調査は，富山県農地林務部の委託により，井波町教育委員会の協力を得て，富山県教育委員会が実施した。調査期間は，昭和53年８月７日から８月22日までである。

3．調査事務局は，富山県埋蔵文化財センターに置き，主任川口稔・文化財保護主事上野章が調査事務を担当し，所長竹内俊一が総括した。

4．発掘調査は，富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事岸本雅敏・同神保孝造が担当した。調査期間中，井波町教育委員会派遣社会教育主任横山和幸・同社会教育主事大和秀夫両氏の参加協力を得た。

5．本書に掲載した遺構実測図は，神保・岸本が作成し，岸本が製図した。掲載写真は，遺構を岸本が，遺物を狩野睦・橋本正春が撮影した。

6．本書の編集・執筆は，岸本雅敏が担当した。なお，稿をまとめるにあたって，金子拓男・京田良志・橋本澄夫・橋本正・藤田憲司の諸氏から有益な御教示を得た。

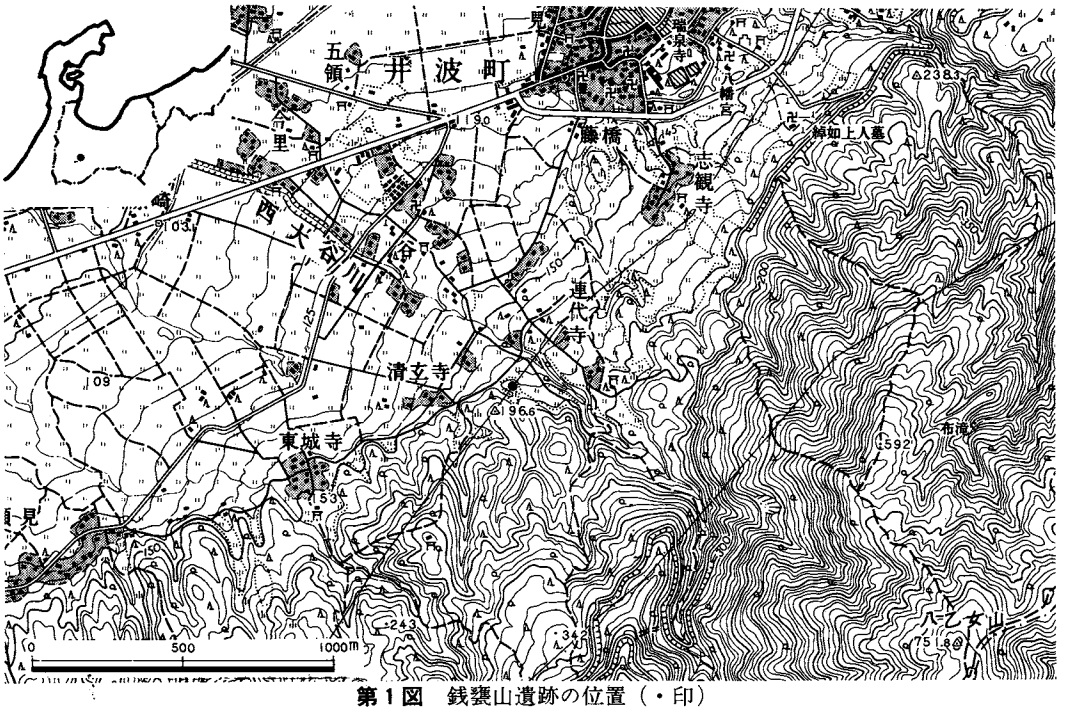
Ⅰ　遺跡の位置と環境

散居村で知られる砺波平野は，富山県の南西部に広がる。庄川・小矢部川の下流に形成された肥沃な沖積平野であり，比較的早くから開墾の鍬が入れられた地域でもある。平野の南東部は，南の飛騨高原から伸びてきた大寺山(919m)・八乙女山(751m)の山塊によって遮られている。その西側山麓には，いくつもの小支丘陵が波形に派生し，平野部との境をなしている。

銭甕山遺跡は，そうした小支丘陵の一つ，銭甕山（ぜにがめやま）と俗称される小山の頂に立地する。地図（第1図）と対照すれば，井波市街の南東約1kmの清玄寺地内にある。

八乙女山中の渓谷に源を発する小河川，西大谷川は，平野部に達して段丘状の扇状地を形成している。銭甕山はその扇頂部に位置し，標高 177m，平野部との比高わずか10余mである。支丘陵末端の高まりであるこの山は，東西55m，南北30mの，一見，独立丘陵状を呈する（第2図)。山頂からの眺望はすぐれ，東に八乙女山を仰ぎ，西に散居村の広がる砺波平野を一望することができる（表紙写真)。

さて，周辺に目を転ずれば，清玄寺・連代寺・東城寺など寺名をもつ地名が注意をひく。これらは，いずれも中世に存在した止観寺（天台宗）の子院名であり，のち地名として遺存したものといわれる。清玄寺・東城寺部落から出土した五輪塔は，かつて寺が存在したことをわずかに示唆している。また，井波を代表する端泉寺は，本願寺勢力拡張の拠点として建立され，民衆の信仰を集めたが，同時に一向一揆の拠点ともなった。このように，この地域が中・近世を通して仏教と深い関係にあることは，銭甕山遺跡を理解するうえで，看過しえないであろう。



第1図　銭甕山遺跡の位置（・印）

II 調 査 の 概 要

1 調査以前の知見

調査の概要を述べるまえに，この遺跡に関する調査以前の知見についてふれておく。この遺跡は，県の遺跡台帳及び『富山県遺跡地図』に，古墳として登載されている。遺跡は古墳の存在するような丘陵上に立地するが，この立地条件を積極的に評価しても，なお古墳であるという確証は見出しえない。このことから，古墳であることを疑問視する見方もあった。だが，遺跡が未調査であったため，その性格については，説得性のある見解を示しえなかった。

今回の発掘調査を通して，古墳でないとする上記の推測は，ほぼ裏づけされたと思われる。したがって，遺跡台帳の「銭甕山古墳」なる名称は，今後，単に銭甕山遺跡と称することにする。

銭甕山の伝承と伝世された壺 遺跡の近くの民家に，かって銭甕山から出土したといわれる1個の壺（第7図）が，家宝として伝えられている。伝承によれば，同家の先祖が，昔，銭甕山から3個掘りだした内の一つで，中にはいずれも朱が入っていたという。一方，近くの高瀬部落には，昔，朱を入れた3個の甕を山に埋めたという言い伝えがあり，伝承としては上記の話とほぼ合致する。

こうした伝承は，考古学の原則からいえば，伝承という次元に押しとどめて理解すべき性質をもつ。事実，考古学的には，上記の壺が銭甕山から出土したという確証は得られない。またそれを証明することもむつかしい。したがって，上記の壺は，「清玄寺の古墳らしき所より出土」〔長島1959〕とか「銭甕山遺跡出土」〔橋本1977〕として報告されたこともあるが，厳密にいえば，伝銭甕山出土ということになる。こうした理由から，本書では，銭甕山遺跡と上記の壺とは，ひとまず切りはなして考えることにする。

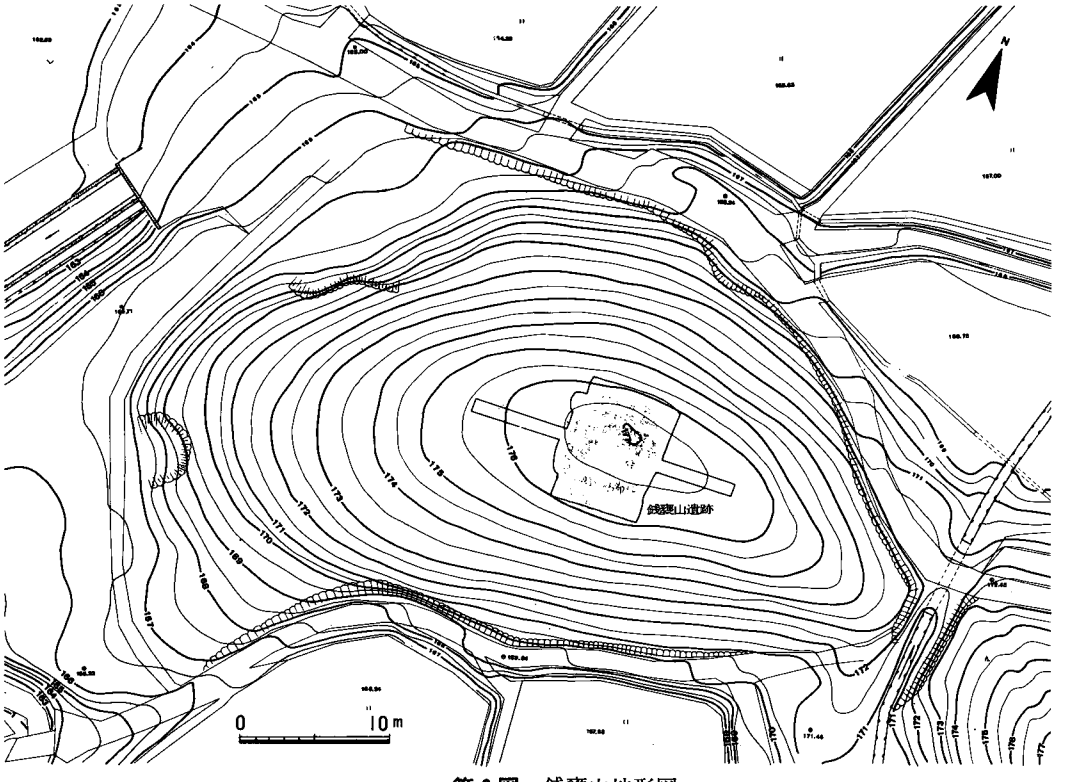
ただ，上記の伝承から，①銭甕山がある時点で盗掘された，②その際，壺又は甕――現在未確認の――が出土した，この二つの蓋然性のあることは，導き出せるだろう。

2 調査の経過

調査の契機 銭甕山遺跡がある南山見地区（旧南山見村）は，岩倉政治の小説『村長日記』〔岩倉1940〕に，その舞台として「南山根村」の名で登場する。『村長日記』には，耕地整理を推進した村長が描かれているが，南山見地区では，今また昭和50年から大規模な「耕地整理」を進めている。県農地林務部で計画・実施している県営ほ場整備事業がそれである。

県教育委員会は，その施工予定地内にある遺跡を保護し，工事との円滑な調整を計るため，県農地林務部と事前協議を行っていた。そして，工区内の遺跡については，施工に先だち試掘調査を実施する予定であった。この銭甕山遺跡もまた，工区内に含まれる遺跡の一つであった。すなわち，施工計画によれば，ほ場整備の一環として銭甕山全体を削平するというものであった。

この遺跡は，先にもふれたとおり，その内容が不明確であったため，遺跡の範囲・遺存状況等の確認を目的として，まず試掘調査を行うことになった。



第２図　銭褒山地形図

第１次調査　調査は，井波町教育委員会が主体となり，県教育委員会から調査員を派遣して昭和52年11月に実施した。その概要は,〔橋本1978〕のとおりである。

調査では，遺跡を中心として，東西18m，南北６m，幅１mのトレンチを十字形に設定した（第２図)。この調査を通して，遺跡には，約４m×４mの規模で石が方形に配列されている[註1]こと，そしてその内側に盗掘坑のあることが確認された。また，盛土がみられないことから，古墳ではないと考えられた。しかし，試掘調査のもつ制約から，遺跡の性格を究明するまでには至らなかった。なお，遺物はまったく発見されなかった。

調査終了後，県及び町教育委員会と県農地林務部との間で，遺跡の措置について協議がなされた。その結果，最終的には，記録保存を前提とする本調査を実施することになった。

第２次調査　調査は，例言に記したとおり，県教育委員会が主体となって，昭和53年８月に実施した。調査では，第１次調査で設定された２本のトレンチの清掃・観察・記録をまず行った。この作業で，東西トレンチ内にみられる角石は，遺跡の東寄り・西寄りともに，地山を切り込んで配置されている[註2]ことが看取された（第４図)。これらの石は，発掘区を拡張したところ，ほぼ方形に配列されていた。また，その内側の盗掘坑を掘りさげた結果，その下半に至って，これは遺跡形成時の土坑そのものであることが判明した。

註１　これは，土坑の周囲を二重にめぐる配石遺構のうち，その内側にあたる。
註２　これは，土坑の周囲を二重にめぐる配石遺構のうち，その外側にあたる。

Ⅲ 遺　　構

今回の調査で検出した遺構は，方形の配石と，その中央に掘られた土坑である。銭甕山遺跡は，大きく，この二つの部分的遺構[註1]と次章で述べる遺物などから成りたっている。

1　配石遺構と土坑（第3・4，図版1）

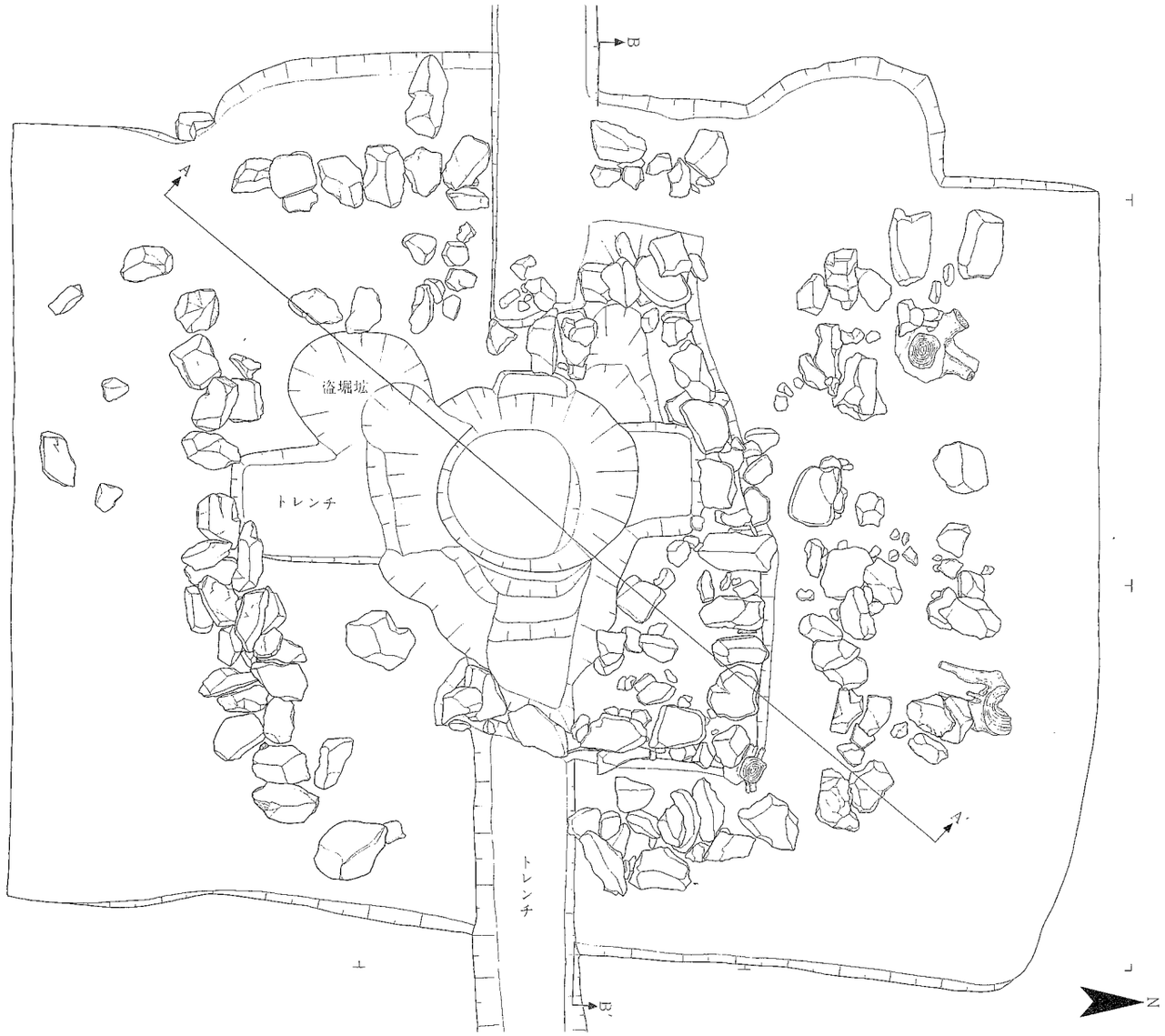
配石遺構　土坑の周囲を二重にめぐると考えられる。内外ともに各所で配石を欠き，空白部分がみられる。外側の配石では，南辺の遺存状態がもっとも良好であり，ここでは石を配列するだけでなく，更に積み上げている部分がみられる。東辺・西辺も，現存する石はほぼ原位置をとどめている。北辺は，急斜面に接するため崩れが著しく，原状はほとんど認められない。内側の配石は，その大半を欠いているが，北辺とそれに接する部分が遺存する。

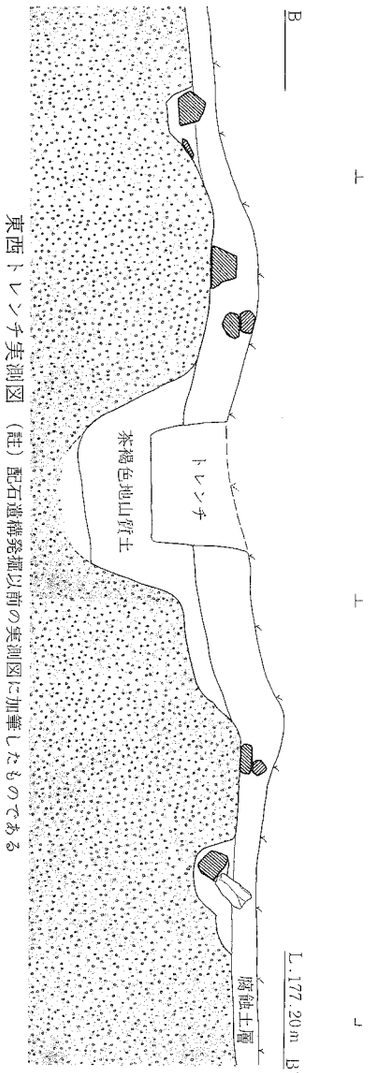
外側の配石は，東西トレンチの断面（第4図）で見るかぎり，地山を掘りこんで石を配置している。しかし，斜面に接する南辺では，レベルがやや低くなるため，地山をわずかに整形してその上に配置している。内側の配石には，北辺で観察するかぎり盛土はみられず，地山を整形して石を置いている。内側の配石は，外側のそれよりもやや高く，約30cmの較差をもつ。

配石に使用された石材は，この山に産する石とは明らかに異る。一辺40cm×30cm×20cm前後の角石に近いものが多く，他所から搬入されたものと考えられる。

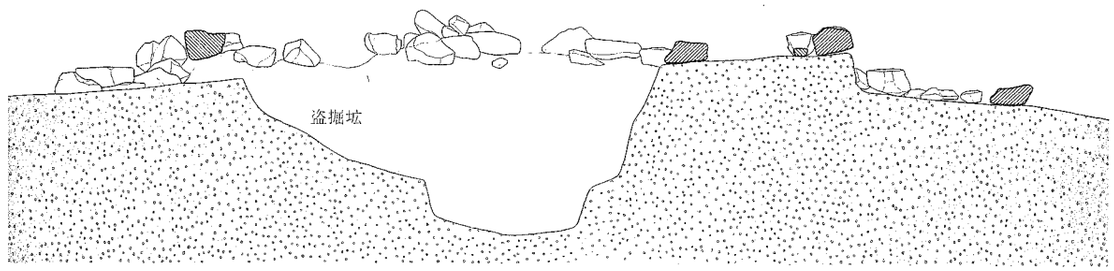
土坑　配石遺構のほぼ中央に位置する。最上層部は，盗掘による攪乱のため，土質も軟弱であった。下半部を掘り下げるに至って，地山を掘りこんだ穴は，遺構形成時の土坑であることを確認

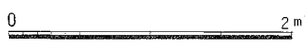
第3図　遺構全景（東から）





東西トレンチ実測図（註）配石遺構発掘以前の実測図に加筆したものである





第4図　銭襲山遺跡遺構実測図　　遺構断面図

した。またその覆土の状況などから，かつて土坑の底面まで盗掘を受けていると考えられた。これは，先にふれた銭甕山の伝承に対応する。土坑の上半部についても，排土を行った結果，原形をほぼとどめていると考えられた。ただしこの土坑の南西に接する穴は，明らかに盗掘坑である。

土坑の平面はほぼ円形を呈し，断面の形は素掘りの井戸に似る。規模は，地山上面からの深さ1.3m，上端部復原径約２m，底面径１mである。底面は平坦でなく，やや丸味をもつ。底面から30cm上の北側に，わずかな段をもつ。

なお，土坑内覆土中からは，珠洲系中世陶器片８点が出土したのみで，その他，骨片・焼土などはまったく検出されなかった。

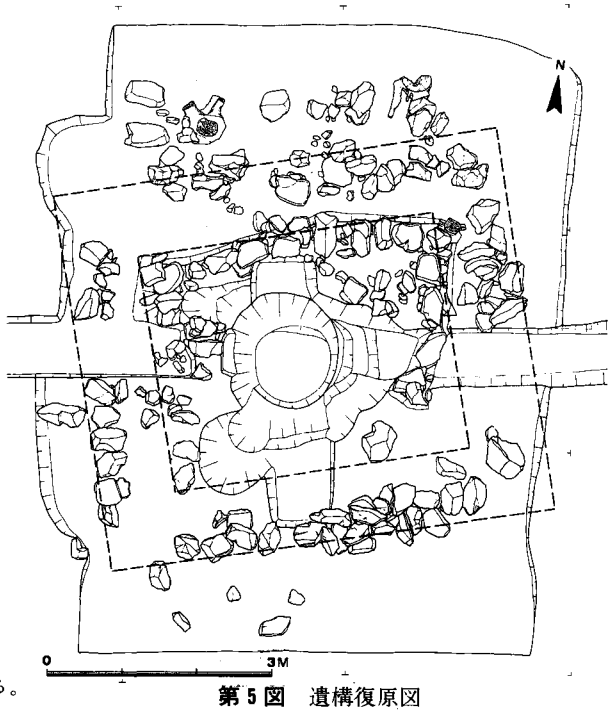
2　遺構の復原（第５図）

この遺跡は，中心部を盗掘されていた。また，遺跡の性格を考えるうえで大きな意味をもつ配石遺構も，遺構形成時の原形を良好にはとどめていない。ここでは，配石遺構を中心として，遺構のおおよその姿を推定復原したい。

まず，配石遺構が少くとも二重に囲繞していることは，それぞれ遺存する部分があるから異論ないと思われる。その規模については，測点の置き方によって若干の差違を生ずるが，ひとまず第５図のように復原した。その復原数値を示せば，外側の配石は東西約６m，南北約５m，内側の配石は東西約４m，南北約３mである。内側と外側の配石の間隔は，約１mと推定される。上記の数値及び第５図から明らかなとおり，配石遺構の平面形は正方形ではなく，銭甕山の主軸にそった長方形となる。これは，東西に伸びるこの山の自然地形に規定された結果と考えられる。

外側の配石は，最も遺存状態の良好な南辺の一部から復原すれば，いずれの辺もこのような積み石状であったと推定される。しかし，基壇状に積みあげたものが崩れたとはみなしがたいから，整然とした基壇状遺構を復原することはむつかしい。内側の配石についてそう考えるのは，更に困難である。以上のことは，地山整形によって配石を行っていることからも首肯されよう。

このように考えるならば，この遺跡は，山の頂部という自然地形の高まりを利用し，地山整形と配石を行うことによって，塚状の効果をもたせようとしたものといえよう。



第５図　遺構復原図

註１「部分的遺構」の概念は，〔近藤1976〕による。

Ⅳ 遺　　物

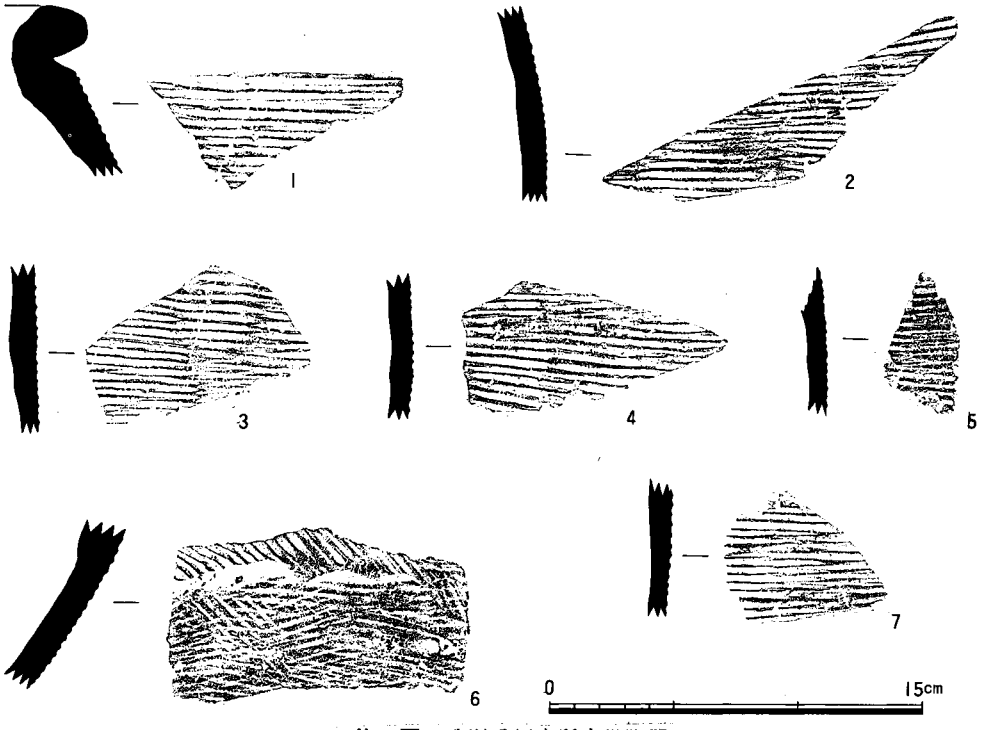
今回の調査で出土した遺物は，珠洲系須恵質中世陶器[註1]の破片のほか，近代の盗掘に伴うと考えられる一銭銅貨のみである。出土遺物が少いのは，埋納された遺物が本来少かったと推定されることに加えて，のちに数回にわたる盗掘を受けたためと思われる。

1　珠洲系須恵質中世陶器（第６図・図版２）

計10点ある。そのうち８点は攪乱を受けた中央の土坑内覆土中から，１点は土坑に接する盗掘坑内，他の１点はその南西約２ｍの地点の腐蝕土中から出土した。

口縁部と体部があるが，同一個体に属すと考えられる。器種は，丸縁口縁をもつ大甕である。

１は口縁部で，復原口径はおおよそ60cm前後と推定される。口縁部の形態は，いわゆる玉縁ほどには肥厚化しておらず，オサエによるゆるやかな角をもつ。肩部が若干遺存しており，肩の上端，頸部に接してわずかな段をもつ。外面には，この段以下に横方向の条線状タタキ目文がみられる。タタキの凹凸は浅く，かつその間隔も５㎜と幅広である。内面には，頸部以下に無文の円形アテ具痕をとどめる。胎土中はもとより器内外面にも，大小の小石・気孔が多くみられ，胎土・焼成ともにあまり良好といえない軟質の製品である。色調は淡灰褐色。６は底部に近い体部で，胴部と底部の接合痕が明瞭にみとめられる。外面には，接合部を境として，上部には右さがりの，下部には横方向のタタキ目文がみられ，下部には更に右さがり及び左さがりのタタキを施してい



第６図　珠洲系須恵質中世陶器

る。内面は，アテ具をあてたのち，更に横方向にナデている。爾余の破片は，すべて体部で，破片によって器厚が若干異るのは，部位による違いと考えられる。いずれも外面には，前二者と同様，幅広で浅い条線状タタキ目文がみられる。

これらの珠洲系陶器片は，吉岡康暢氏による珠洲陶の最新の編年〔吉岡1977ｃ〕と対比すれば，そのⅣ期ないしⅤ期にほぼ該当すると考えられ，したがって，14世紀後半ないし15世紀代の所産とみなしうる。

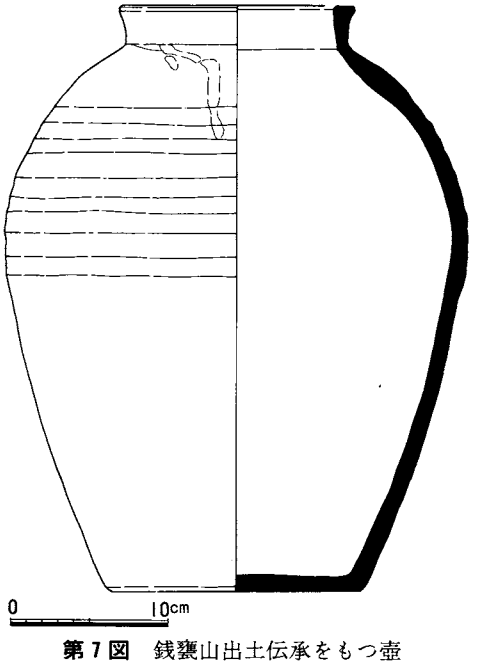
傍頭にのべたとおり，これらは主として遺跡中央の土坑内から出土したのであるから，遺構形成時には，もとこの土坑内に――おそらく１個の甕の形を保って――埋置されていたものと推定される。と同時に，これは遺跡の形成年代を決定しうる唯一の遺物であるので，これによって，銭甕山遺跡は室町時代に構築されたものと考えることができよう。

2　銭甕山出土伝承をもつ壺（第７図[註2]・図版２）

銭甕山から出土したものとして，遺跡近くの民家に伝わるものである。Ⅱでふれたとおり，銭甕山から出土したという確証を欠くが，参考資料として取りあげる。

口径15cm，高さ37.5cm，底径16cm，底部から23cmのところで体部の最大径29.4cmをはかる。口縁部は，高さ 2.5cmで，わずかに外反ぎみにほぼ直立する。口縁端部は，ところどころわずかに欠損しているが，蔵骨器にしばしばみられるような人為的な打ち欠きとは異る。体部及び底部の器厚は１cm前後である。肩部のみはやや肥厚する。体内面の上半及び外底面・体外面には，暗褐色の鉄釉をかけている。外面には，体部の上半から肩にかけてロクロ成形による凹凸がみられる。

この壺の産地については，確定しえない。年代については，良好な対比資料をもたないが，江戸時代以降に下るものと推定される[註3]。こうした推定に立てば，前述した今回の出土陶器との間には，かなりの年代的へだたりをもつことになる。



第７図　銭甕山出土伝承をもつ壺

註１　北陸を中心に日本海域・東北の各地から発見される須恵質の中世陶器は，かつては「珠州焼」とみなされていた。しかしその後，新潟・福島・山形の各県で須恵質中世陶器の窯跡が発見されるに至った〔吉岡1977ａ・楢崎1977〕。そして，その製品が珠洲窯の製品と同一の器種構成・成形技法によっていることから，吉岡康暢氏は，それらを「珠洲系の須恵質中世陶器」と仮称されている〔吉岡1977ａ〕。

「珠洲系」なる限定詞には若干の疑問が残るとしても，吉岡氏のこの提唱は，能登一円以外から発見されるいわゆる珠洲焼をおしなべて珠洲窯産とみなしえないことが明らかとなった今日では，妥当性をもつ。しかし，珠洲系の陶器は，吉岡氏自身いわれる〔吉岡1977ｂ〕ように，「個々の製品についてはほとんど判別」が「困難」であるから，本書では，「珠洲陶」を避け，ひとまず上記の語を採用した。

註２　橋本正春氏の実測・製図〔橋本1978〕による。

註３　金子拓男・橋本正両氏の御教示による。

V 遺跡の性格

これまで述べた調査結果から明らかなとおり，今回の調査では，遺跡の性格を直接的に示す材料は得られなかった。そこで，まずこの遺跡を構成する諸要素を整理したうえで，類似遺跡との比較を行いつつ，遺跡の性格について検討する。

遺跡の性格　調査結果から整理・要約すれば，銭甕山遺跡は，おおよそ以下の諸要素から成る。

1．遺跡は平野部に接する小丘陵の頂部に立地する。1基単独で存在し，類似する遺構が集中するような存在形態はとらない。

2．遺構は，土坑とそれを二重[註1]に囲繞する方形配石列，この二つの部分的遺構から成る。

A．配石はつぎのような諸特徴をもつ。①規模は，外側が一辺約6m×約5m，内側が一辺約4m×約3mである。②平面の形は長方形[註2]である。③石積みを行っているが，基壇状にはならない[註3]。④地山整形ののち配石している。

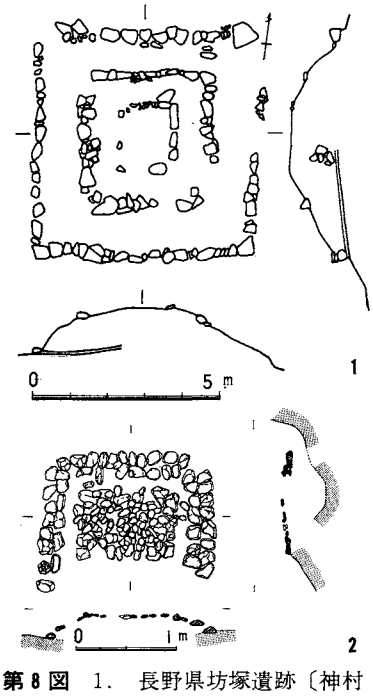
B．土坑は，旧地表面からの深さ約1.8mである。平面は，底面で径1mの円形である。

C．人為的な盛土は，現状では認めがたい[註4]。他方，地山の整形は行っている。

3．遺物は，土坑内から出土した珠洲系中世陶器片（大甕）のみである。これは土坑内に埋置されたものと考えた。

4．遺跡の形成年代は，上記の遺物によって室町時代と考えうる。

このような遺跡は，富山県内ではこれが初例であり，また県外においても類例は多くない。この遺跡を特徴づけるものは，言うまでもなく二重の方形配石遺構をもつ点である。この点に限定して類例を求めれば，最も近似するものとして長野県の坊塚遺跡[註5]〔神村1971〕を挙げることができる。方形の石列を三段に配しており，その基底部は一辺約6mである。第8図[註6]にみるとおり，規模・形態ともに銭甕山遺跡と酷似する。また丘陵の頂部にあるという立地条件も共通する。なお，この遺跡は，報告では行人塚・山伏塚のような信仰壇の一種とされているが，中世墳墓とみる見解〔遮那1975〕もある。また，中世禅僧の墳墓である新潟県華法寺の伝高阿廟址〔中川・岡本1959〕にも類似するが，これは敷石を伴う基壇状遺構とみなされる点で，銭甕山遺跡とはやや様相を異にする。



第8図　1．長野県坊塚遺跡〔神村1971〕2．石川県軽海第22号墓址〔小村1973〕

その規模・形態を捨象し，方形配石をもつ遺跡全般に枠を広げれば，墳墓をはじめ信仰壇・経塚その他各種の遺跡に多くの例がみられる。とりわけ墳墓の例が多く，それらの大部は配石の中央に蔵骨器を埋置した火葬墓である。奈良県大王山遺跡の墓址群中には，その好例がみられる〔伊

藤1977〕。他方，第８図に示した石川県軽海墓址群第22号墓址〔小村1973〕のように，配石遺構でありながら蔵骨器を伴わない火葬墓の例も多々みられる。

方形配石を伴う信仰上の基壇の例としては，新潟県弥彦山１号塚〔青木1978〕がある。この遺跡もやはり三段の配石をもち，その基底部の一辺は 4.5m× 5.3mである。形態的には銭甕山遺跡に類似するが，信仰上の基壇という性格に起因してか，その中央部にはなんら内部施設をもたない。その点，銭甕山遺跡は土坑を伴っており，信仰壇と安易に結びつけるには，なお慎重を要すると思われる。

内部施設をもち，かつ方形配石を有するものは，経塚にもみられる。しかし，規模・形態その他の様相は，銭甕山遺跡とはかなり異る。銭甕山遺跡からは珠洲系の大甕が出土しているが，一般に経塚から大甕が出土する例はみられないようである。また，室町時代の経塚の埋経形態は，地面に直接納経するものと寺院に納経するものとの二種にほぼ限定され，外容器を使用した例はみられないという。[註7] こうした理由から，銭甕山遺跡を経塚と推定することもむつかしくなる。

以上述べたところから，銭甕山遺跡は中世墳墓であると考える。[註8]

埋葬形態　北陸地方の中世後期の蔵骨器は，一般に加賀古陶・「珠洲焼」あるいは瀬戸系の壺を容器とし，珠洲系の大甕を利用したものはみられない。一方，新潟県では，九州の弥生時代の甕棺のように，珠洲系の大甕二個の口を合わせ，中に遺体を埋葬した例がある。[註9] また富山県でも，朝日町臼ヶ谷遺跡のように，土坑の底面に板石を蓮花状に敷き，その上に遺体を座位で埋葬したうえ珠洲系の大甕で蓋した例がある〔竹内1977〕。臼ヶ谷遺跡の土坑は，地表からの深さ 175cm，径 150cmで，底面近くに段をもち，段以下は径が小さくなる。この土坑の形態は，銭甕山遺跡のそれと共通する。[註10] 同様の土坑は，島根県の檜山古墓第13号墓〔近藤1971〕にもみられる。この場合もやはり人骨が確認されており，桶形の棺に埋葬されたものと推定されている。なお，珠洲系の大甕を棺として利用したと思われるものは，富山県朝日町殿の塚状遺構でも確認されている。[註11]

こうした点から，銭甕山遺跡の場合も上記の諸例と同様，座位による遺体埋葬が推定される。大甕は，おそらく座棺として利用されたものであろう。

墳墓の性格　方形配石墓でありながら銭甕山遺跡とは様相を異にする墓址群をとりあげ，それとの対比を通して被葬者及び墳墓としての性格に接近したい。

比較の材料として，奈良県大王山遺跡の墓址群中のそれをとりあげる。これは，細部を捨象すれば，おおよそ次の諸特徴をもつ。すなわち，①約50基が一つの尾根上に群在するという存在形態をとる。②個々の遺構は，規模において大差がみられない。③その規模は一辺約１m強であり，きわめて小規模である。④配石は石積みをなさず，平面的に配置している。[註12]

便宜上，大王山遺跡をＡとし，銭甕山遺跡をＢとして両者の対比を行えば，存在形態では，Ａが集団墓的であるのに対し，Ｂは単独で存在し，「独立墓」の形態をとる。Ｂの規模は，Ａに比べて一辺４ないし５倍であり，面積に換算すればかなりの差をもつ。配石については，Ａが基本的に一重で，かつ平坦な配置であるのに対し，Ｂは二重（二段）であり，段によって一定の高まり又はそれに近い効果をもたせている。この差異は，Ａが蔵骨器あるいは火葬骨を囲繞する施設

的な性格をもつのに比べ，Ｂには土塔あるいは「塚」としての意識が看取され，配石はその一構成要素となっている。

こうした二者の差異は，墳墓類型の単なる違いにとどまらず，墳墓としての性格の違い，換言すればその被葬者の性格の相違をも示唆していると思われる。中世のすべての人々が方形配石墓を築きえなかったことは，伝統的な土坑墓の存在から明白である。この点からすれば，大王山遺跡の配石墓は，中世の墓制としては決して「薄葬」とは言いがたいものである。銭甕山遺跡は，その大王山遺跡と比べても，より「厚葬」に近いとみなしうる。上述の対比から，銭甕山遺跡の被葬者は，埋葬にあたって大王山遺跡のような集団墓域内に包括されえない，つまり集団から超越した特殊な人間に限定されると推考されるのである。考古学の方法から離れるが，この地域の歴史的背景を考慮して一つの憶説を示せば，中世に存在した天台の止観寺あるいはその子院である清玄寺・連代寺などの高僧を，その被葬者に充てることも，あるいはできるかもしれない。[註13]

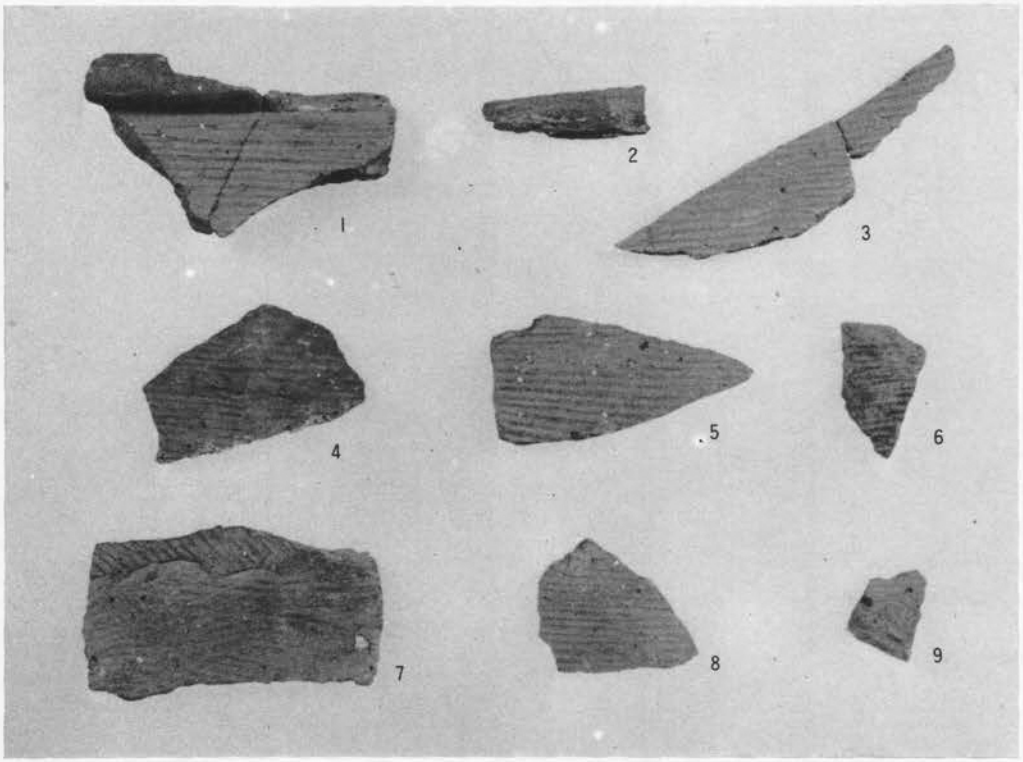
註１　土坑を囲繞する配石列が三重（三段）であった蓋然性は否定しえない。それを想定するとすれば，遺跡の中央すなわち土坑の上面にもう一重あったことになるが，この部分は盗掘による攪乱を受けていたため，調査では，その存否を確認しえなかった。
註２　類似する遺跡を一瞥するかぎりでは，正方形，長方形という形の違いは，遺跡の性格的な違いを端的に反映しているようにはみえない。要するに，「方」という形を意識して構築されているのであり，この点にこそなんらかの意味を見出すべきであると考えている。この点に関しては，大化の薄葬令が封土の規模を方何尋と規制していることから，この「基本的原則」が中世墳墓に至るまで受けつがれていたとみる考え〔池谷1968〕もある。魅力ある見解ではあるが，中世の方形墳墓をもそのような系譜の延長線上においてはたして把えうるかどうか，なお検証を要すると思う。
註３　方形配石をもつ墳墓は，基壇状遺構としてしばしば復原されている。これには，餓鬼草紙にみえる方形基壇状の墳墓が一般的・基本的形態と理解され，これに規定されている面も多分にあるように思われる。確かに，新潟県華法寺の伝高阿廟址〔中川・岡本1959〕のように，基壇状遺構を伴うものも存在する。しかし，個々の遺跡に即して検討してみると，必ずしもそうした形態を復原しえないものも少くない。本遺跡もその一例と考える。
註４　土坑の上面には，もと盛土があったものと推定される。配石を被覆していた腐蝕土は，それが流出・堆積したものか。また，他の諸遺跡や餓鬼草紙にみえる墳墓などから類推すれば，遺跡中央の頂部には，もと五輪塔・卒塔婆などの標示物があったことも推定される。
註５　坊塚遺跡については，今村善興氏から種々御教示を得た。
註６　出典は，〔神村1971〕第64図および〔小村・室町1973〕第６図である。
註７　金子拓男氏の御教示による。
註８　表紙の副題中にある「中世墳墓」の語は，こうした筆者の見解のうえに立って使用したものである。
註９　金子拓男氏の御教示による。
註10　銭甕山遺跡・臼ヶ谷遺跡にみられる土坑の規模・形態は，大甕を利用した埋葬形態と有機的関連をもつものと考えられるだろう。この点からも，銭甕山遺跡は，蔵骨器を埋納した火葬墓とはみなしがたい。
註11　清原為芳氏の御教示による。径約３ｍほどの塚状の高まりの中に，臼ヶ谷遺跡と同様に珠洲系の大甕が口縁を下にして埋めてあった。なお，珠洲系の大甕を棺として利用する埋葬形態は，北陸地方では，火葬墓とならんでかなり普及した埋葬形態であったと考えている。
註12　筆者は「方形配石墓」と把えたが，〔大三輪1977〕では，「敷石墓」としている。
註13　銭甕山遺跡の場合，具体的に被葬者を確定することはできないが，この種の墳墓は，新潟県伝高阿廟址例などから推して高僧の墳墓ではないかとひそかに考えている。

参考文献

ア　**青木宏1978**　『弥彦山居１号塚発掘調査報告書』　新潟県教育委員会
イ　**池谷和三1968**　『静岡県遠江地方に於ける中世蔵骨器の研究』　静岡県教育委員会
　　伊藤勇輔編1977　『奈良県宇陀郡大王山遺跡』　榛原町教育委員会
オ　**大三輪龍彦1977**　「中世墳墓」　『考古資料の見方〈遺跡編〉』　柏書房
カ　**神村透1971**　「坊塚信仰壇」　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　長野県教育委員会
コ　**小村茂1973**　「第22号墓址」　『軽海中世墳墓群―発掘調査概要―』　小松市教育委員会
　　近藤正1971　「松江・檜山古墓群」　『島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅲ集』　島根県教育委員会
　　近藤義郎1976　「原始史料論」　『岩波講座日本歴史』別巻２　岩波書店
シ　**速那藤磨呂1975**　「日本各地の墳墓（中部・北陸）」　『新版仏教考古学講座』第７巻　雄山閣
タ　**竹内俊一1977**　「ふる里・両越国境の遺跡を掘る」　『富山教育学窓』Vol．３　富山教育学窓会
ナ　**中川成夫・岡本勇1959**　「越後華法寺中世墳墓址群の調査」　『史苑』第20巻第２号　立教大学史学会
　　長島勝正1959　『南瀬地区・南山見地区文化財調査報告書』　井波町文化財保護委員会
　　楢崎彰一1977　「中世の社会と陶器生産」　『世界陶磁全集』３　小学館
ハ　**橋本正春1978**　「銭甕山遺跡」　『昭和52年度富山県埋蔵文化財調査一覧』　富山県教育委員会
ヨ　**吉岡康暢1977ａ**　「遺物」　『珠洲法住寺第３号窯』　石川県教育委員会
　　吉岡康暢1977ｂ　「地方窯の展開―能登・珠洲窯の場合」　『地方史と考古学』　柏書房
　　吉岡康暢1977ｃ　「加賀・珠洲」　『世界陶磁全集』３　小学館

1
遺構全景　西から

2
配石遺構南辺　東から



1　銭甕山遺跡出土珠洲系須恵質中世陶器（1/3）

2　銭甕山出土伝承をもつ壺

銭甕山遺跡の調査

－井波町清玄寺所在中世墳墓発掘調査概報－

発行日　昭和54年３月31日
発行者　富山県教育委員会
編著者　岸　本　雅　敏
印刷者　北日本印刷株式会社